

母 M さんからのお願い

生まれてきてありがとう

胎児診断で見つかった我が子の心臓病

36W の妊婦検診の時に「心臓の部屋の大きさが少し違うので専門の病院で検査してもらいましょう。赤ちゃんが小さいのも心配なので・・・」と先生に言われ、長野県立こども病院を紹介されました。36W という週数だったので、一瞬にしてならくの底に突き落とされたような大きなショックを受けました。「何で・・・」「どうして・・・」「何がいけなかったの？」ただただ涙が出るばかりでした。検査の日には37W に入っていて、心臓だけでなく、赤ちゃんが小さいというもう一つのリスクがあり、当日は少しでもいい方向に考えるようつとめました。「この子はおなかの中にいるときに心臓病が見つかり、運がよかった。生命力のある子なんだ」と自分に言い聞かせ検査に望みましたが、不安や迷いは検査の間も消えませんでした。

検査の結果、先生から告げられた病名は、「大動脈肺動脈中隔欠損」「大動脈弓離断」でした。先生はわかりやすく正常な心臓の絵と、お腹の子の心臓の絵を描いてどこが違うのか、生まれた後はどうなるのか丁寧に話してくださいました。これがもしお腹の中にいるときにわからず生まれてきたら、ショック状態になり、命は助からないかもしれない考えると、やっぱりこれでよかったのかなと思いました。先生の話の聞いているときも涙ばかりでてきて声にはならず、涙をおさえようとしてもおさえきれませんでした。検査が終わって帰る車の中で、呆然と外を眺めながら帰ったのを思い出します。

37W ということもあり検査の2日後、不安な気持ちのまま総合周産期母子医療センターへの入院となりました。入院時に自然分娩が可能ということで「陣痛がくるのを待ちましょう」「分娩時には新生児科の先生、循環器科の先生も立ち会うので心配はいりませんよ」といわれ、万全の体制をとっていただけることに少しは気持ちが楽になりました

入院中は、不安な気持ちはありましたが、産科の先生、スタッフの方々が親切でいつも温かく見守っていただいたおかげで無事女の子を出産することができました。大きな産声をあげて元気に生まれてくれました。生まれたばかりの娘の顔を見ることができたのですごく嬉しかったです。出産後すぐに処置をしていただいたおかげでショック状態に陥らずにすみました。その後は、新生児科に何度も娘に会いに行きましたが、娘の顔を見るとやはり迷いました。こんな小さな体にメスを入れなければならないのか。親として育てていけるのかといった不安。とても悩み、迷い、苦しみました。

でも、私の友人に心臓に疾患をもってうまれてきて、こども病院で手術を受けたお子さんがいました。その友人に何度も助けられ、勇気づけられました。母としての悩み、不安、迷いは同じものでした。迷いがあるのは当然のこと。我が子が可愛いと思えば思うほど迷いも大きくなりました。ただ辛いのはいつまでも迷っていられないということ。決断をしなければ中途半端な気持ちで後悔することになってしまう。勇気のいることでした。我が子とはいえ一人の命の問題を決めなければならないからです。

生後一週間後に手術を受けました。手術中は、娘のがんばりを信じて待ちました。皆の祈りがきっと娘に通じると思うから・・・。待つことしかできないけど、待っている人がいると、人は強くなれる。そして、強い思いは必ず届いて叶うと信じたいから。手術は無事終わりました。娘は手術を受けて生きたかったんだと、私は今でも信じています。

胎児診断で分かったからこそ助かった娘の命。胎児診断を受けてよかったと今は心から思います。そして、娘がすごく頑張ったことを知ってほしいと思います。今、娘は生後3ヶ月になりますが、元気にすくすくと育ってくれています。まだ治療は続くけれど、娘のためにも頑張りたいと思います。最後に、「生まれてきてくれて本当にありがとう」と娘に言いたいです。2004.7.4